



Viva Japão apresenta uma nova cultura a estudantes da rede estadual

Em comemoração ao aniversário da imigração, programa da Secretaria de Estado de Educação de São Paulo divulga a cultura e as influências da imigração japonesa no Brasil

Por Talita Zanetti

Já começa a dar os primeiros frutos um dos mais expressivos projetos em comemoração ao Centenário da

de alunos da rede estadual de ensino e tem fundamentalmente a função pedagógica. "Nosso objetivo é o estudo e ampliar o conhecimento dos alunos sobre a cultura japonesa", explica.

O programa "Viva Japão" é direcionado aos estudantes do ensino fundamental e médio e promove a divulgação da cultura japonesa através da inserção de conteúdo nas disciplinas e também trabalhos desenvolvidos pelos próprios alunos. Dinorah Hasegawa Sato, assistente técnico-pedagógica da diretoria de ensino de Osasco conta que, após a apresentação do programa, houve um grande interesse das escolas em participar. Segundo ela, uma das escolas de

o "Viva Japão" possibilita uma vasta gama de áreas a serem exploradas, como a música, a dança, o esporte e a culinária. Além disso, para Dinorah, a saída da rotina de aula atrai os alunos. "O programa trouxe subsídios diferenciados e assim, os alunos conseguem ter um novo olhar sobre o aprendizado", declara.

Esse interesse é confirmado pela estudante do terceiro ano do ensino médio, Aline Bandeira de Souza, de 18 anos. Aline já participou de dois trabalhos relacionados ao "Viva Japão": o coral, que interpreta músicas japonesas, utilizando instrumentos brasileiros; e uma palestra sobre a imigração japonesa em São Paulo. "Eu me envolvi bastante e com



Alunos apresentam música japonesa ao som de instrumentos bem brasileiros, como Atabaqui e Agogô

Imigração Japonesa, o programa "Viva Japão". Lançado em fevereiro deste ano, pela Secretaria de Estado de Educação de São Paulo. o "Viva

mais iniciativa foi a Major Telmo Coelho Filho, em Osasco. "Na Major Telmo todos os professores se envolveram e estão participando do pro-

66 Nosso objetivo é o



Hiroyuki Hino posa à frente da logomarca do "Viva Japão"



Japão" visa divulgar a cultura, a história e a imigração japonesa, nas 5500 escolas estaduais. Hiroyuki Hino, diretor técnico da Coordenadoria de Estudos e Normas Pedagógicas, Cenp, e idealizador do projeto, conta que o "Viva Japão" abrange cerca de cinco milhões

estudo e ampliar o conhecimento dos alunos sobre a cultura japonesa ”

grama", diz. Dinorah esclarece que esta escola tem, aproximadamente, dois mil alunos, sendo que o número de *nikkeis* não chega a 2%. Entretanto, isso não prejudicou o interesse dos estudantes, que abraçaram a iniciativa.

Isso não poderia ser diferente, já que

isso, a gente acaba aprendendo muito da cultura", afirma.

O programa "Viva Japão" segue até junho do ano que vem, quando os melhores trabalhos devem ser apresentados nas Comemorações Oficiais do Centenário. De acordo com Hino, estão inscritos na Secretaria de Educação cerca de 300 projetos relacionados ao programa, e 50 deles já foram aprovados.

“ O programa trouxe subsídios diferenciados e assim, os alunos conseguem ter um novo olhar sobre o aprendizado ”



Apresentação dos alunos da escola Major Telmo, em Osasco, teve direito a vestimentas típicas e dragão, o que encantou a todos os presentes



大耳 小耳

先週、百周年協会総会、他イベントなどで上原委員同席理事長のあいさつを計三回拝聴した。内容は、日伯政府に設立されたを賞賞、聖州公立校で日本文化を教えるプロジェクト、即ち「サマシヤ」がサンパウロ市長を無償提供の一点に絞られる。協会自体がやっている。

とは結構なことがないのか。「人の種で相撲を取っている」と感嘆されても任力がないだろう。今日十日には、のさばり口の認可が下りた。これからの「協会」は「一」というあいさつを期待したいところ。

MATÉRIA PUBLICADA NO JORNAL "NIKKEI", DE 17/04/2007

SEÇÃO : GRANDE OUVIDO E PEQUENO OUVIDO

No semana passada houve mais uma Reunião Gerol da Comissão do Centenário da Imigração Japonesa no Brasil.

Na ocasião, o Presidente Kokei Uehara, no seu discurso de abertura, destacou 3 eventos mais significativos: 1º- constituição da Comissão Governamental Brasil-Japão ; 2º- Programa "Vivo Japão" da Secretaria de Estado da Educação que visa ensinar a cultura japonesa aos alunos da rede estadual de ensino; 3º- sessão gratuita do Sambódromo.

E a Comissão? Não há nenhum projeto da entidade? Não há como fugir das críticas, tal como "faz sucesso com chapéu alheio".

Neste mês a Comissão do Centenário recebeu autorização para funcionar como OSCIP e com isso, esperava-se do Presidente no seu pronunciamento: "Dessa forma, a Comissão"

Tradução livre por Hiroyuki Hino



Notícia da I Nikkei Shimbun – Edição de 27 de abril de 2007 – Seção de “Oomimi e Komimi”

Durante a cerimônia de lançamento da Comissão de Trabalho para o Centenário da Região de Vale do Ribeira, a Diretoria de Ensino da Região de Registro anunciou que recebeu, até o momento, 34 projetos sobre o Programa Viva Japão. Este Programa é da Secretaria de Estado da Educação de São Paulo e está sendo desenvolvido por todas as escolas estaduais com objetivo de estudar o Japão e sua cultura. Trata-se de uma programação da Secretaria alusiva à Comemoração do Centenário da Imigração Japonesa no Brasil. O número é bastante significativo por ser a região, o berço da imigração japonesa.

Na ocasião, foi anunciada também a reforma de duas pontes das seis existentes na região, pintando-as com as cores das bandeiras do Brasil (verde e amarela) e do Japão (branca e vermelha).

東洋区命名や記念誌発刊も

マード独自の記念事業を準備 アシヤ 百年祭に向け盛り上がる

日本人が唯一の海外指定地であるマード市は、市役所と日本団体から百年に向けて独自の事業に取り掛かっていることが分かった。市の発展に貢献のあった日本移民の名前を顕彰する「マード市シニア・オリエンタル」を来年八月までに十ウグワリンとする予定で、その他、記念誌の出版などが進められている。また、目的は教職員、日本湖の海外を教授として同地へ送られた中村トシユネと長谷川博士を顕彰する理髪をしており、百年の機会に顕彰があるのではと期待が高まっている。

87回目迎える招魂祭



鎌倉市長と静岡市市長

鎌倉市長と静岡市市長「エンタル」に、町の発展を、来年新しく拓かれる地に百歳のあった日本移民の名前を「シニア・オリ」各面を通りに付けるプロ

ジェクトが進められており、百歳十軒の公共住宅の建設も進んでいるという。さらには市立博物館にある市の歴史に関する展示に、現在では日本移民に関するものが少ないため、静岡市長は「もっと増やしたい」との意欲を示した。鎌倉市市長と静岡市市長「エンタル」によれば、両市の日本移民百年委員会が昨年発足し、計画を練ってきた。記念誌を刊行するかどうか、記念誌を刊行するかどうか、アが検討されているという。加えて、市からの百年祭に対する顕彰事業の一環として、市役所が準備している。初期に入植した移民の歴史を調査して、日本人の歴史をまとめた本として出版する計画も進められている。すでに数人の証言を集めはじめ、さらに戦前の写真などの収集も始めている。

日本研究に熱入る

聖州公立校移民百年控えて

【サンパウロロコ時事】 日本からの移民開拓百周年を来年に控えたブラジル、全日系人の注目を集めるサンパウロ州では、日本人移民に敬意を表し、日本人から公立学校で日本研究を力にするユウラムが取り組む「ピバ・ジャボン」が実施されている。これは、教師や生徒に、その歴史を伝えるための「文化祭」を開催する。グラウンドに話したというシラウさん「下茶で茶の面を再現。い

聖下の地は広島の原爆投下をテーマとした展覧会などでも開催される。この年に反響が出ると期待しているが、生徒らの「積極的な」反応に驚いていると語った。「中国と日本を混同するなど、まだビシントの外れたところもあり、まだまだこれから。ピバ・ジャボンの発足者である州教育委員の意欲を見せている。



■記者の眼■

“お寒い”百周年協会会見

低調な伯メディアの関心

ブラジル日本移民百周年記念協会（上原幸四郎理事長）が二十五日午前、日伯メディア向けに記者会見を開いた。

○四年三月に伯メディア約二十社を集めて行なわれた記念ロゴマークの発表会以来の大きなニュースとなる予定だったが、何と日ホメディアを除くと、会見に臨

んだのは、二社のみ。連山賢孝・広報担当によれば、約三十社に連絡をしたという。

はほぼ全社が揃った日ホメディアには目もくれず、上原理事長、エスタドの記者の出席に満足の様子。会場に拍手を求め、もう一人の女性記者を「彼女の子どもは私の教え子なんですよ」と

と何とも嬉しそうに会見は始まった。

そもそもこの会見、四月に百周年の免状口座団体（OSCEB）「文化社会統合機関」が連邦法務省より認可されたことを受けたもの。今月十日に予定されていたが、何の理由か二週間後となった。

本部長百周年自体に関心がない。時期尚早、記者の興味を惹くプロジェクトの不届、等を、そして、根回しの態さが指摘されても仕方がない。

今回のように大きく発表する意思を持って行う意見であるならば、ニュースを提示することもできることながら、綿密な連絡も必要だろう。実際、今回出席した記者の一人には前日に連絡があったという。

振り返れば、前出のロゴマークもあれだけ大きく報道したにも関わらず、百周年の広報を担当する大手広告代理店ワケの意向で昨今、いとも簡単に現在のロ

ゴマークに變更されてしまったことは周知の通りだ。このことは内々に処理されていたため、広報どころか臨時会見で事後承諾されたのみ。

こういう経緯を考えると、協会の記者会見に対する姿勢に問題ありとされても仕方がないだろう。さて、百周年協会が発行している機関誌「エコー」の表紙にも大きく掲載されているのは、聖州政府教育局が実施する日本文化教育プログラム「J-Culture」。

上原理事長は、今回の会見でも同プログラムについて力説していたが、こういう

う、他人の種で相撲を取る、広報はやめた方がいいだろう。もっと協会主導のプロジェクトを推すべきだ。

吉岡啓明・文化委員長はイベントのコーディネートにも就任しているようだが、〇三年に立ち上がった協会の歴史から、日本側からのキャンセル、活動停止状態、表現不可能に近いプロジェクトなども含め延々と説明。途中で司会のラジオ・ニッケイの宮城ハワード氏に時間の経過で意図されていた。

記者会見をするのなら、少なくとももう少し調音も必要だ。

長は百周年関連事業に一千七百万レアル（約九億円）が必要とし、イタウー、ブラジスコ、ブラジル、スタメリス、カイシャ・エコノミコ五銀行の口座番号の掲載を依頼するという、かなり直接的な広報活動を会見の場で行った。

伯メディアが来なかった理由は色々考えられる。日

隣にいた松尾治氏が執行委員長に就任するとき、総務委員長だった吉岡氏をはずすことが大きな条件とされていたはずだが、なぜか松尾氏は押し黙っている。

松尾氏は押し黙っている。松尾氏は押し黙っている。松尾氏は押し黙っている。

ともあれ、資金調達にはプロジェクト実施の最大の難関、OSCEBという専門性は出来た。さらに門外漢は出た。さらに門外漢は出た。さらに門外漢は出た。

かにはしてはならない、という。かにはしてはならない、という。かにはしてはならない、という。

かにはしてはならない、という。かにはしてはならない、という。かにはしてはならない、という。

「VIVA JAPAO」の現場をゆく《上》

州政府日本文化
教育プログラム



日本がテーマの研究発表に没入する生徒たち

原爆、歌やYOSAKOIも

記者が教育委員と向き合い、その取り組みの現状を調査した。海外出張、文化交流など、さまざまな活動を通じて、生徒たちが日本の文化を学ぶ機会を得ている。

オザスコ ミツポン 学ぶ子供たち 生徒自身がテーマ選んで

今年二月に発表された愛知県政府の日本文化振興プログラム「VIVA JAPAO」が盛り込まれている。オザスコ市の小学校で、テーマ選びや発表の準備を進めている。生徒たちは、自分たちが興味のあるテーマを選び、積極的に発表している。



日本の歌をソングで披露する生徒たち

海外出張や文化交流など、さまざまな活動を通じて、生徒たちが日本の文化を学ぶ機会を得ている。生徒たちは、自分たちが興味のあるテーマを選び、積極的に発表している。

オザスコ市の小学校で、今年二月に発表された愛知県政府の日本文化振興プログラム「VIVA JAPAO」が盛り込まれている。生徒たちは、自分たちが興味のあるテーマを選び、積極的に発表している。発表のテーマは、原爆、歌やYOSAKOIなど、多岐にわたる。生徒たちは、自分たちの調べたことを、ソングやダンスなどで表現している。

「VIVA JAPAO」の現場をゆく 《下》

100周年で優秀校を表彰 交流基金も学生招待を検討

「テレビで見たから」と、数人から話を聞くと、交流基金も学生招待を検討している。優秀校を表彰するだけでなく、学生間の交流も促進したいという意向がある。



オザスコ市の日野さん、パトリシアさん、交流基金の代表者らと話す様子

オザスコ市の日野さん、パトリシアさん、交流基金の代表者らと話す様子。交流基金も学生招待を検討している。優秀校を表彰するだけでなく、学生間の交流も促進したいという意向がある。



「お茶はいいが？」と話しかける「オザスコ」のババ、マリアーナさん

州政府日本文化教育プログラム

「VIVA JAPAO」の現場に行く

「サン・マテウス編」

JICA派遣教師らも訪問

「日本に帰って伝えたい」

日系生徒、教師のいない学校でも「ニッポン」学ぶ。聖州教育局の日本文化教育プログラム「VIVA JAPAO」への参加申請は、州内九十学区のうち、実に八十一学区二百十六校（ブロンジエクト数は百四十七）が行なっており、約二十万人の生徒が日本文化に触れる予定だ。このたび、多くの在日ブラジル人が住む中部地方から、教師八人が国際協力機構（JICA）中部主催の調査教育指導者研修「教師海外研修プログラム」を利用し、VIVA・JAPAO実施校を視察訪問した。「これは日本文化が受け入れられているとは、在日子弟の背景も含め、教育の場で伝えていきたい」と教師らは、感きをもって話した。

州内316校が参加

今回訪れたのは、聖州東部サン・マテウス区にある一校の教師らとの懇話会で、マエストロ・ブレノ・リア・テレサ校長は、歓迎の言葉を表し、同プロジェクトを三月から始めたこと

と、七歳から七十歳までの全校生徒が参加していることなどを説明。「九十九人がアフリカ系の子供で教師にも日系はいないが、日本文化を学ぶ機会を多く持つてほしい」と話した。



折り紙で飾り付けられた教室を生徒たちに案内される日本の教師ら



日伯両国旗を掲げた幕を広げ、「ヴィヴァ・パンザイ」の音が響いた

JICA中部の今井成寿・連携促進チーム副責任者が、愛知など中部地方に多くの日系ブラジル人が住んでいることなどを説明。参加教師らがそれぞれ挨拶した。

訪問当日は各生徒らがそれぞれの研究テーマを発表する。ニッポン文化祭。教師らは、テーマ別に分けられた各教室を訪問。生徒らに説明を受けていた。色とりどりの折り紙で飾られた教室でアマンダさん（一歳）とサブリナさん（二歳）は、折り方は「週間」で覚えた。アヒルが得意と笑顔を見せた。



熱心に取り組んだ」と感心の高さを強調した。

洗濯き、口クロを使っての両面作り、教室の一角を茶室に見立て、基の湯の世界を表現するなど、生徒と打合せが感心のある日本文化理解に取り組んでいた。

テレーザ校長によれば、学級増強などもあったが、今回を機に生徒自身による校内美化運動を展開、再行していた校庭に大きな日の丸を飾るなど校庭改善の意でも「VIVA・JAPA」の活動を挙げた。

視察後、ステージでは、定時刻の生徒による合唱「ゲイシャ」、忍者が登場する演劇、柔道やカポエイラの演舞で両国の格闘技の融合を強調。

大目 小目

聖州政府の日本文化教育プログラム「VIVA・JAPA」の目野喜幸コーディネーターによれば、同プログラムは「赤のガンザシに白のシヤツ、赤い髪飾りで日の丸を表現した衣装でサンバを踊った女子生徒らは、日伯両国旗を模した幕をステージ前に広げた。生徒たちによる「ワイヴァーパンザイ」の音が響き渡った。

ステージに立った八人の教師らは、日本語で「ふ

教育関係者に好評で今年だけでなく、もう一年延長して実施する可能性がでてきているという。インターネットなどで情報を得ている学校が多く、地元支協などとの連携がこれから求められそう

る」と、会場からは万雷の拍手が送られ、アスコールに込め、再度歌う場面もあった。

全校生徒の五光がブラジル国籍の生徒だという長野県伊那市の箕輪中部小学校の北原正治教師は、「華日あじやない生徒たちが目を輝かせて、日本文化を学ぶための積極的に取り組んでいくことに驚いた」と感懐の面持ちを見せた。

三重県立南紀高校の習習さおり養護教諭は、「今回のブラジル訪問の経験を通して知った在日ブラジル人子給の背景を日本の子供たち、同僚に伝えていきたい」と取材に答えた。

3ª edição

Escola lembra bomba de Nagasaki

• A Escola Estadual Provincial de Nagasaki, na Zona Norte de Capital, lembra no último dia 9 os 62 anos da bomba lançada sobre a cidade de Nagasaki, no Japão. As crianças se reuniram e fizeram um canto de paz coletiva: "Bom dia Atômica (não vem aqui)". O evento, que faz parte do Programa Vivo Japão, da Secretaria Estadual de Educação, também contou com apresentações musicais, dramáticas e um minuto de silêncio.

Jornal da Tarde
12/08/2007



毎年日本では、真珠湾攻撃の日には戦争体験を含めて様々な報道がされるが今回、日に止まった記事があった。

「戦争はよくない、思ってもよらない悲劇さても生む」という趣旨なのだが、ブラジルの旗も負け

問題が取り上げられた。こう無理やりひっかけでは、思わぬ誤解を生むと思うのだが。

念日に戦争体験を含めて様々な報道がされるが今回、日に止まった記事があった。

「戦争はよくない、思ってもよらない悲劇さても生む」という趣旨なのだが、ブラジルの旗も負け

模型など、平和に関する研究を必ず目にした。子供たちの自主性で問題を導くというから、日本のイメージは、アニメ・マンガだけでは無いというところだろう。

広島出身、戦後二世の記者、来年あたり、セアラの河のはとりで古里と平和に思いを馳せたいと思つた次第だ。(順)

NIKKEI SHIMBUN
17/08/2007



聖徳教育局が取り組んでいて日本文化教育プログラム(VIVA-JAPAN)の、約百校(生徒数、十三万)を超える学校が参加申請した。同プログラムの目録を非ユーザーインターフェイス、もう一年継続して

先以、市東部の学校を訪ねた。生徒たちの研究結果発表会になったのだが、教師も生徒も日本語が、口も聞かず聞いた。中国などと同様にして

先以、市東部の学校を訪ねた。生徒たちの研究結果発表会になったのだが、教師も生徒も日本語が、口も聞かず聞いた。中国などと同様にして

日本食文化が調度、いわゆる、スシ、オムライス、は世界中から、長寿を享受した。が、こういうケースには、日本政府的関係機関を通じて、積極的にを備えて

日本食文化が調度、いわゆる、スシ、オムライス、は世界中から、長寿を享受した。が、こういうケースには、日本政府的関係機関を通じて、積極的にを備えて

NIKKEI SHIMBUN
10/08/2007